

ゆっくりしつかり

冬の空はいつも鉛色だから
陰鬱になりそうな気持ちに鞭打ってみる
これが冬なんだから、仕方がない、どうしようもない。
「ゆっくり、しつかり、」歩けば良い

世界中が恐慌とかで、寒風が吹き荒ぶ、
東京の日比谷に「年越し派遣村」ができ
若者が真剣になって「がんばろう」と言う
頑張りようが無いんだから、中年男は涙を流す

大儲けして、得意満面で記者会見をしたのは何時、
私は見ていた、数ヶ月前のこと、
フォードを抜いた世界一、
同じ顔で百年に一度の不況と言う

つぶれてくれ、もういいよ、
一流企業がこの程度なら、訣別しよう、
さようなら、さあ、寒風の中に出て行こう
海に行こう、山に行こう、大地に立とう、
もういいよ、私たち自身もバカだった
バカを見抜けぬバカだった
立派なビルを一流と言って見上げたから
私たちもバカだった。

この時を忘れるな
この姿を忘れるな
寒風吹き荒ぶ大都会で
骨身に刻め、これが日本だ。

霧の向こう

上越線は霧の中を走る
私を乗せて都会に向かって走る
もつともつと濃い霧に包まれるのか
白い霧の呪縛が迫る

瞬きもせずに

窓辺に寄り添う私

呆然と何も考えていない

異様に濃い冬の霧の奥へ何処までも、

霧の中を走って上越国境まで来た

私は初めて大きな溜め息をつく、霧が流れる

青い空といっしょに山の頂きが出て来た

険しく、雪山は輝きながら出て来た

一瞬の輝きを振り切って

上越線は長いトンネルに入った

私を乗せたまま入った

黒く長いトンネルに入った

安心するなと言っているようだ

黒の世界が始まったと言うのか、

お前は走って逃げるのかと責める、

違う、違う、直ぐ帰って来ると首を振る

秋月

今日の月が守門岳の上に出た

あの月を見よ

この瞬間を胸に止（とど）めよ

神々しく堂々と今正（まさ）に出（いず）る

そして私の心を奪う

赤く大きな秋の月

この月を見逃すな

この瞬間を胸に止めよ

空ちゃんが言葉を失って

天使の溜め息をついた

月が静かに秋の夜を奪う

月が宇宙の夜を独占する

山々も川も月に飲まれ

秋の夜のしじまが流れだす

満月の夜だから只見線に乗る

満月に近付くために乗る

あの月まで只見線よ走れ

あの月まで私を乗せて走れ

狂ったように秋月に向かって走れ